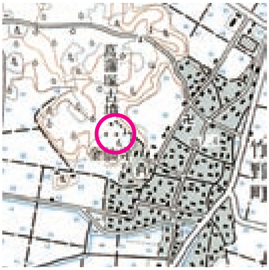

図82　古墳の位置　2万5000分1地形図「角田山」

菖蒲塚古墳　西蒲区竹野町

菖蒲塚古墳は角田山東麓の台地先端部、平地との比高約二〇メートルの所にある。全長五三メートルと県内最大クラスの古墳であるとともに、日本海側で最北端に位置する前方後円墳として著名で、昭和五（一九三〇）年に、国の史跡に指定されている。現在、古墳周辺は墓地として使われている。

図83　北上空から見た菖蒲塚古墳

図84　南西から見た菖蒲塚古墳の台地

　菖蒲塚古墳に関する最も古い記録は、文化八（一八一一）年に刊行された『北越奇談』である。当時は古墳時代の墓とは考えられておらず、言い伝えに基づいて、源頼政の妻、菖蒲御前が葬られた墓とされた。また、菖蒲塚古墳に隣接する隼人塚古墳は、その家臣の猪隼太の墓とされた。どちらも古墳の名前や地名の由来となっている。

　平成十四（二〇〇二）・十五年に、古墳の範囲を確認するための発掘調査を巻町教育委員会が行った。その結果、菖蒲塚古墳は、緩やかな傾斜をもつ台地の上に全体の形を設計した後、周囲に溝を掘り、その際に出た土や周囲の整地作業

で出た土を盛り上げて造られたことが判明した。また、土を盛る際に、土質の異なる土を交互に盛るなど、墳丘の強度を増すための工夫がされていた。周囲の溝からは、古墳の上から転落したと考えられる壺（つぼ）が見つかった。この壺の特徴から、古墳時代前期の後半（四世紀後半）に造られたことが明らかになった。また、隼人塚古墳の調査も行われ、直径約二一メートルの円墳であることが確認された。菖蒲塚古墳と同じ時期か、非常に近い時期の古墳と考えられ、菖蒲塚古墳に葬られた人物の従者の墓の可能性も推測さ

図85　菖蒲塚古墳・隼人塚古墳平面図

図86　前方部に供えられたと推定される壺

図87　鼉龍鏡　個人所蔵

図88　『北越奇談』の掲載図

図89　副葬品と推定される勾玉(左端）と管玉　金仙寺所蔵

れている。

菖蒲塚古墳から江戸時代に出土した鏡（鼉龍鏡〔だりゅうきょう〕）は、直径約二三・七センチメートルで、県内で出土した鏡の中で最大である。古墳に葬られた人物の力の程がうかがえる。この鏡は県指定文化財になっている。また、古墳の麓にある金仙寺〔こんせんじ〕には、江戸時代の発掘で出土したヒスイ製の勾玉〔まがたま〕一点と管玉七点が残されている。古墳の後円部の埋葬施設内に副葬品として納められていたものと考えられ、国指定文化財になっている。

角田・弥彦山麓には、ほかに前方後円墳がもう一つある。菖蒲塚古墳から矢川沿いに南へ約六キロメートル上流にある、弥彦村の稲場塚古墳である。全長二六・三メートルで、採集遺物や古墳の形から、県内で最も古い時期の古墳と考えられている。菖蒲塚古墳の前方部は稲場塚古墳の方角に向いている。また、菖蒲塚古墳の全長は稲場塚古墳のほぼ二倍である。造られた時期がやや異なるものの、二つの前方後円墳の関連が気になるところである。